

日本文化や生活習慣に陰陽五行説が無数溶け込んでいるが、その事例は無数にあり、その羅列ではなく、面白いものの一部です。

陰陽は、人生においては「日向と日陰あり」、人間の性格においては「真と嘘あり」で、万般事象に「表裏一体」の関係にあります。表であの人は「頭がいい」と言えば裏側の「脳足りんの馬鹿である」と一緒・同時に発言したことになります。「決断力がない」と言えば「慎重である」と同時に、「慎重である」と言えば「決断力がない」と同時に、「快活である」と言えば「陰湿である」と同時に、「陰湿である」と発言すれば「快活である」と同時に発言したことになります。

1. 大嘗祭 (図-1; 神社本庁 HP より)

同祭は、天皇御一代に一度行われる祭祀ですが、数ある皇室祭祀の中で最高の重儀（最秘儀）とされています。令和今上天皇は 2019（令和元）年 11 月 14 日(木)～15 日(金) 大嘗宮の儀を斎行されました、特別に造営された東方の祭場「悠紀殿」、西方の祭場「主基殿」を中心とした「大嘗宮」において斎行されました。国費 24 億円なり。

西と東の左右両極はまさに陰・陽の対応な

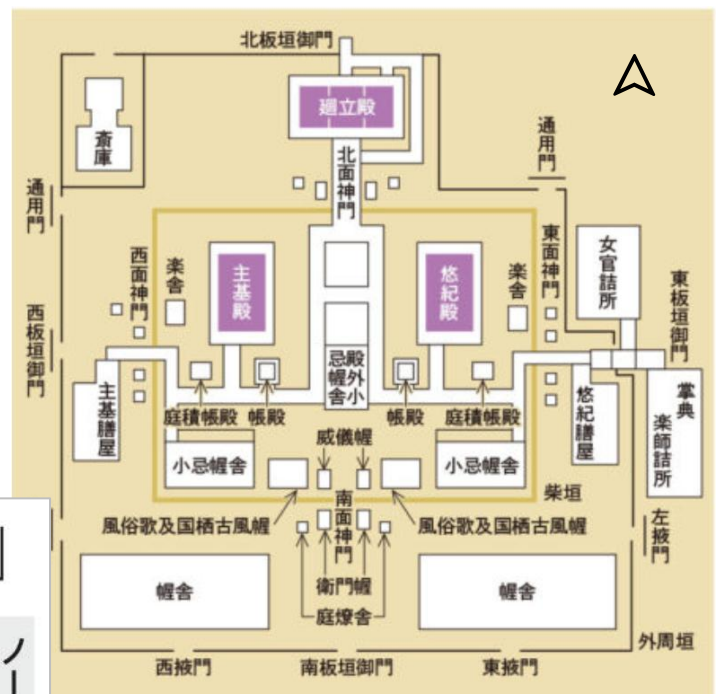


図-1

のです。もちろん、現在は陰陽の対応などとは言いませんが、古儀においては明白です。現在の中国政治体制の好き嫌いはあるものの、しっかり中国の文化・歴史が今の皇室に繋がっています。

ところで、2019(令和元)年 12 月 4 日(水)、
「大嘗宮」が一般参観、公開されていることから皇居に行って来ました、とにかく大勢の人人・・・、坂下門からたった 1 km ほどに 4 時間掛りました。



図-2

2. 真逆の執着心

図-2のとおり、2019年のノーベル化学賞の一人として旭化成の吉野彰さんが受賞されました。インタビューで次のように語っております。「・・・研究者は基本的に、一つは柔軟性と、もう一つは真逆の執着心というか、しつこく、しつこく最後まであきらめない、この二つが必要だ。一番難しいのは、剛と柔のバランスをどうとるかだ。固いばかりだとめげる、柔らかいばかりだと前に進めない。・・・」

私は「真逆、剛と柔」の言葉に着目します、まさに、陰陽相對（相待）の原理を以て自分の心を解き明かしています。最先端の科学者が、敢えて意識したかどうかは分かりませんが、若き後輩研究者にエールを贈る言葉の中に「陰陽」の精神が溶け込んでいたのです。

3. 一人に同居する相反

五木さんは図-3中において、「まったくあい反する二つの性格が同居しているのだ。」と述懐しています。私の思う処とぴったり一致です。



新・地図のない旅

五木寛之

2021(R3)0621(月)山形新聞

* コロナのもたらすもの

自分のことを考えると、ときどきわからなくなることがある。

まったくあい反する二つの性格が同居しているのだ。たとえ私は人間嫌いという傾向がある。ステイホームですと人と会わなくても、一向に困らない。孤独にふよい、などといえは恰好つけているようだが、実際にそうなのだ。文章を書くのは独りの仕事なので、その意味ではありがたいところもないではない。

しかしその一方で、人としてやべるのが大好き、という側面があるのも事実である。若い頃は夜を徹して友人と語りあい、睡眠不足になることもしばしばだった。喫茶店で人と会うと、一杯のコーヒーを前に何時間も粘って、お店の人にうつつしがられるタイプの客である。

しかし、新型コロナウイルスの蔓延以来、友人知人とひさしぶりで会っても、昔のように自由におしゃべりができなくなってきた。

それぞれちゃんとマスクをしていても、ソーシャルディスタンスが気になる。テーブルをへだててはすかずに坐り、二メートル以上の距離をとる。

ひよつとすると相手が陽性で、本人が気づいていないだけかもしれない。そいえば、さつき何度も咳をしていたようだが、などと疑心暗鬼はお互いさまだろう。

「いつまで続くんだろなあ、こんな日常が」

「そうだな。困ったものだ」

「気が滅入るね」

「この先、どうなるんだろう」

「さあ」

と、いった調子で、一向に話がはずまない。

「ワクチン接種の案内、きたかい？」

「きた」

「おれのところは、まだだな」

「テレビで注射のシーンをやたら流すよね」

「うん」

「あれ見ると、健康そうで、いかにも注射しやすそうなの、つくられた腕にピュッと針をさすだろ」

「筋肉注射だからな」

「おれなんか年とって腕の筋肉なんてないからね。骨と皮の細い腕に、ちゃんと打てるのかい」

「腕が無理なら、尻にでも打ってもらえば」

「お互いに力なくフフと笑って話がとぎれる。」

「それじゃ、また」

「お互い、気をつけよう」

「そうだな」

と、いう感じで、口角泡を飛ばして論じあつた時代が嘘のようだ。

「あいつ、ちよつと声がかすれてたけど大丈夫かな。帰つたらすぐ手洗いしなければ」

と、若い頃からの友人のことを疑つたりするのもあさましい。

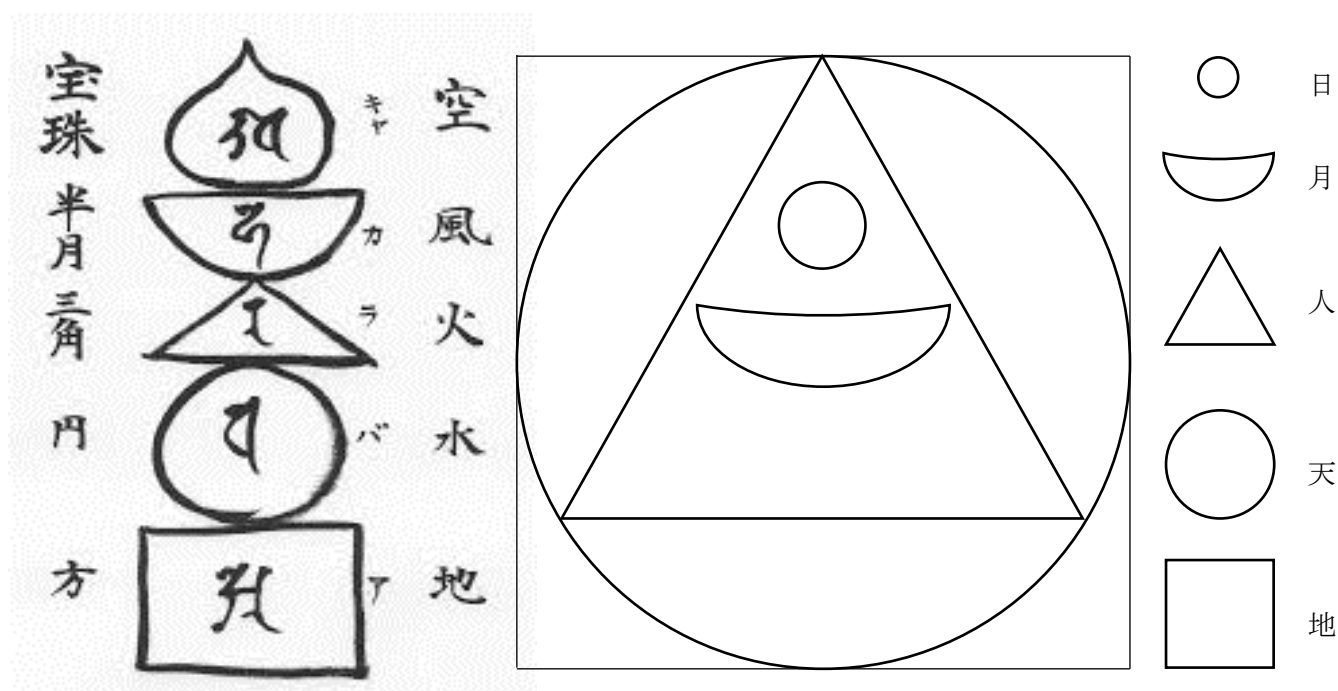
コロナ流行の問題点は、経済生活のダメージだけではない。人を疑う心が蔓延していくところにもある。いかに法令でマンボウをかけても、効果はないだろう。困ったことだ。

図-3

4. 五大元素

世界を形作るとされるものは図(表)-4のとおり、「地」「水」「火」「風」「空」の五つとする思想がある。また、「空」「風」を日・月、「水」「地」「火」に天・地・人を重ねて説くこともある。

図(表)－4	
項目	意味付け
空（日）	虚空、神秘的な宝珠系。小さい丸（宇宙の中心にある太陽）
風（月）	成長、拡大、自由を表す。水と火の中間の半円
火（人）	力強さ、情熱、何かをするための動機づけ、欲求などを表す。尖った三角形
水（天）	流体、無定形の物、流動的な性質、変化に対して適応する性質。転げ回る円
地（地）	大地・地球を意味し、固い物、動きや変化に対して抵抗する性質。安定した正方形



図－5

「五」と謂えば、私はすぐに「木・火・土・金・水」の「五行」が浮かび、混同されやすいが、両者は全く別個に成立したもの。原初を辿れば、五大は仏教の世界から、五行は神の世界から生まれて来たと云われている。同五大を身近な処で造形化したものが広く知れ渡る「五輪の塔」(図－5)である。同図右端の日・月・人の図柄も円(天)と四角(地)の変形・派生であることは言うまでもない。

また、五大の形を下から上に積むものに、墓に立てる卒塔婆(そとうば)(図－6)もある。

なお、ここで取り上げた「円弧と四角」は、前記12ページ「7. 大曼荼羅絵図」の段で記述し

た「曼荼羅絵図は佛教の教え・理念（大日教）を幾何学模様・図式（円と四角）を用いて説いたもの」に繋がっている。

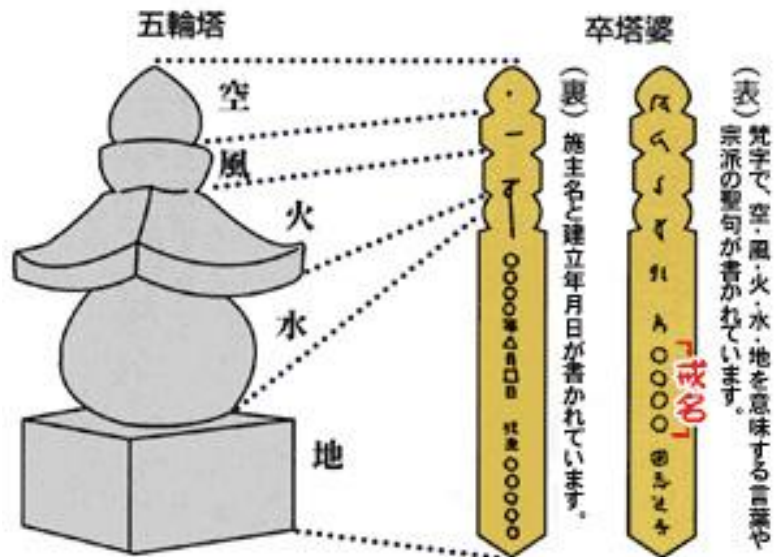
5. 当地区の「山の神社」

図一7のとおりの耕源寺南側にあります。

陰陽和合の象徴と謂えば、民族学・歴史学・神仏学の分野では「山の神」がその一つです。山の神信仰は、田の神信仰などと習合し地域的な差異が大きいとも言われるが、全国的にほぼ統一して基層に流れるものがあり次のような事が云われています。

春になると山の神が田の神となって里に降りて来る、農作業と農作物・米の生育を見守り、そして、秋の収穫を見届けると、また山の神となって戻って行くと信じ、大いなる生産の神として崇め祀って来ました。山の神は甚だ醜い面相の女性だと思われている所が多いという。依って女性だから一物（男根）を供えと、真に喜ぶという事から、丸太きづくりい木造、あるいは石造の男根を奉っている所が多いようです。

内部にあるもの図一8のとおりで。同上は石造で、建屋で囲ったような中には夫婦らしき像が彫られています。



図一6



図一7



図一8

図下を見ると男根に似ているものとそれを受けるように合体した石があり、その左にも同様・同態のものが見えます。

6. 当地区の「舟地藏」

図－9は個人の庭にある先祖伝来のものです。舟に見立てた三日月状の反った石の凹部に、角張った棒状石柱を突き立て、その上に丸状のごっつい石を乗せ、さらには、棒の根本には三角錐状の石が置かれています。これは何かを物語っているように見えます。

私はこれに陰陽和合を暗示したものと直感したが、その理由は次のとおりです。棒は男根、三角の石は女陰、舟は女体、舟が前後左右に揺れる度に、棒は凹部に増々挿入度合が深まっていく場面を重ねたものでしょう。



図－9

棒に乗っている丸いごっつい石はお地藏様とのこと。ある所では、水害から田畑を守り、農作物の豊作を祈願することや、水害で亡くなった人を供養するために、「舟に地藏を乗せた形」のものを作って祀っているとも言われています。要するにこれは、陰陽の和合による五穀豊穡を込めた造りを表現したものでしょう。

人間そのものにも当てはまります。人間の認識は、このような対抗する二元・二項のせめぎ合いの中で右往左往し、喜怒哀楽の感情となって悩むのであります。喜怒哀楽は、喜と怒、哀と楽はそれ自体が相対です、ところが、そんなことを棚に上げ、都合の良い片方の観方を絶対化しようとし、だから感情が蒙昧します。人間は、本来は陰陽の両面を欲しがりバランスを図ろうとする――陰陽同根の生命体なのです。

自然界も同様で、動物は動物、植物は植物で住み分けをしているが、内部では競争もやります、どこもかしこも、何もかも陰陽廻^{めぐ}って千変万化の様相です。

人間俗界には、偉そうに自論・持論を展開して譲らない堅物の人間が多々おり、口角泡を飛ばしての議論などという格好は良いが、そんな自我・損得勘定の主張はどうでも善いことなのです。

「陽中陰有り・陰中陽有り」で陰陽は永遠に闘^{せめ}ぎ合い、攻守所を変えて、勝負は永遠に付かないのです。自我の応酬は無駄（エネルギーの消費＝最終的には熱になって消失）ということです。

“ もの・こと・人間には一長（陽）一短（陰）あり、優（陽）劣（陰）は一時・瞬時の朝露の如し ”です。相対^{そうたい}・相待^{あいたい}関係において優劣は定まりません。優劣を論ずる時の要素（ファクター）・判断価値基準・物差しは無限に存在します、そして元々は相生（援け合う）・相剋^{そうこく}（削り合う）の両面（下記、五行説）が同時存在するのです、好き嫌い・善悪・正邪等の価値判断基準は静的に定まらないのです。万物・万象において、陰陽二元要素は、離合集散を繰り返すのです。

基本的に陰陽とは、一般的にいう「陰は悪く、陽は善い」というような善悪の意々ではありません、陰陽異なるそれぞれの役割を比較不可と見做す考え方であり、陰と陽の重みは五分五分の対等であるとする考え方です。必要不可欠として求め合う関係にあります、相思相愛なのです。世のもの・ことが陰陽の両極間で揺れるのは、結局は調和・中庸・中和の有り様を求める、探し求める人間の正常な働きとも言えます。

ところで、世の中、議論が白熱・紛糾すると裁判官に扮し、落としどころと称して「Yes（陽）かNo（陰）では無く『中』なのだ」と言う人が表れるが、私利私欲の感情を隠した似非策士がその断片的感情を押し付ける危険なヤカラに過ぎないのです、要注意です。本当の『中』とは、中国古典「中庸」に『喜怒哀楽の未だ発^いせざるをいう』とあります故に、喜怒哀楽や損得勘定の我欲を持たない人にだけ『中』という倫理を語る資格があります。そうです、そのような生身の人間はいないでしょうから、そのようなヤカラは偏ったカタブツなのです。日本の裁判官は安倍晋三首相の付度判官なのでどうしようもありませんから、お世話にならないことが一番賢明なのです。

頑^{かたく}な姿勢を以って「俺には信念がある、執念で初志貫徹」などと持論の正当性を強弁する人が多々います。何が信念？何が執念？と揶揄しています。そんなものは一時の架空のものだと見ていますから、それよりも本当の信念・執念とは「臨機応変・自由自在」であると思っています。

(end)